法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-26

沖縄古語における条件表現の変遷 : 「琉歌」「組踊」を中心に

山崎, 康弘 / ヤマザキ, ヤスヒロ / YAMAZAKI, Yasuhiro

(出版者 / Publisher)
法政大学国文学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
日本文學誌要
(巻 / Volume)
58
(開始ページ / Start Page)
27
(終了ページ / End Page)
38
(発行年 / Year)
1998-07-11
(URL)
https://doi.org/10.15002/00020023

沖縄古語における条件表現の変遷

――「琉歌」「組踊」を中心に――

山﨑康弘

一、はじめに

日本古語の用法において活用語に助詞「ば」が接続するとき、「已然形＋ば」の形式は確定条件を表し、「未然形＋ば」の形式は仮定条件を表す。

上代においてすでにこのような条件法が確立していたのであるが、「已然形＋ば」の形式にあっては、院政・鎌倉時代の頃から仮定の意味にも用いられるようになる。特に江戸時代後期からはこの傾向が強くなり、「已然形＋ば」はもっぱら仮定条件を示すようになり、確定条件は改まった場合や武士の間にわずかに残るだけとなる。このように、「已然形＋ば」の形式には確定表現から仮定表現へという史的変遷が認められる。

一方、沖縄古語の場合には、『おもろさうし』においてすでに条件法の確立をみることができる。(注1) 助詞「ば」が接続するとき、已然形接続と未然形接続には明確な使い分けがあって、そこには確定条件と仮定条件の表現方法が認められる。

「琉歌」「組踊」においても未然形接続は仮定条件を表すが、已然形接続の場合には確定条件のほか仮定条件を表す用法の存在も確認されている。(注2) つまり、日本古語同様に沖縄古語においても已然形接続では確定条件と仮定条件の混淆がみられるのだが、その経緯に関しては必ずしも明確にされているわけではない。そこで、「琉歌」や「組踊」を中心にして、『おもろさうし』以後の条件表現の変遷過程を確認したいというのが本稿の意図するところである。

用いた資料は次のとおりで、以下、「琉歌」「組踊」というときはこれらを指すものとする。

琉歌……『標音評釈琉歌全集』島袋盛敏・翁長俊郎（一九六八年、武蔵野書院）所収の琉歌三千首。

組踊……『琉球戯曲集』伊波普猷（『伊波普猷全集』第三巻、一九七四年、平凡社）所収の組踊十一編。なお、劇中で歌われる短歌形式の琉歌は『標音評釈琉歌全集』

に収められているので「琉歌」に含めた。用例の出所は同書のページ数を漢数字で示し、さらに上段、下段の別を上、下で示した。

二、「已然形＋ば」の用法

(イ)確定条件

活用語の已然形に助詞「ば」が接続するとき、「琉歌」「組踊」においてもその多くは確定条件を表す。前件（前句）と後件（後句）の意味関係から次のような類別をし、その表現性の特徴を指摘することができる。

(a)前件の動作・行動が、後件で導かれる事実・状態に気づく契機となる。なかには後件の出現は偶然的で必ずしも前件を契機としないもの、後件が前件に呼応する形で現れるものもある。総じて両者の関係は一回性のもので、その点で後の(c)と異なり、因果関係の考えられない点で(b)と異なる。

①真物ざな登て円覚寺見れば
　かくれすみぼさが手巾ちやげさ　（琉歌・五〇二）

②千歳へる松のみどりばの下に
　亀が歌すれば鶴や舞方　（琉歌・二四）

③縦さま横さま切りよめぐれば、敵の大勢嵐に木の葉の飛ぶが如くに、　（組踊・花売の縁・二八六上）

(b)前件が原因・理由を表し、その帰結・結果として後件が実現するという関係で、そこには因果性の必然的関係が認められる。

①咲き出たる花の色きよらさあれば
　匂うつさともてお側よたる　（琉歌・四一八）

②情思ゆらばわが名もらすなやう
　よそ知らぬごとの恋路やれば　（琉歌・三七一）

③弟思子やなまわらべやれば、母添へて津堅嶋に御流し
　よめしやうち、　（組踊・大城崩・二三七下）

(c)前件と後件の継起が時間を越えて恒常的に起こる場合で、そういう事実のもとではいつもこうなるという関係を表す。

①ときはなる松の変ることないさめ
　いつも春くれば色どまさる　（琉歌・七六）

②真茅茅ぶきや雨降れば漏ゆり
　里が御衣かさべ雨も漏らぬ　（琉歌・二一三二）

③扨も移ればかはりゆく、人の心ぞ浅ましや。
　（組踊・忠士身替の巻・九八上）

以上、これらの確定条件表現は『おもろさうし』でみられた用法と同じである。また、『おもろさうし』[注3]に現れた「已然形＋ば」の用法のすべてでもある。

(ロ)仮定条件

活用語の已然形に助詞「ば」が接続するとき、「琉歌」「組踊」においては仮定条件を表す場合がある。日本古語の用法にみられるような、確定表現と仮定表現の交錯と考えられる。それらの仮定表現を、条件として掲示された事がらの実現性という観

点から次のように類別することができる。

(a)将来予想されることを仮定するもので、未だ事実でない不定・不明の事がらを条件とするもの。

①酒好きの我身や弁当さへあれば
　潟原の馬もこしどなしゆる　（琉歌・二七六七）

②命さへ我身のながらへてをれば
　また拝むこともあゆらやすが　（琉歌・一八四四）

③首里「城」滅亡ぼすば、此天の下や、我自由しち遊で、浮世暮さ。　（組踊・護佐丸敵討・三七上）

④急ぎあの村むかへ御越しめしやうち、御たんねめしやうれば、森川の御様子委細おんにゆかる筈たやべる。　（組踊・花売の縁・二九三上）

右の外、

「琉歌」⑤夏なれば（五三）、⑥年の寄られれば（二七六）、⑦花とめば（八四三）、⑧いつまでもとめば（八四三）、⑨出でて来よやれば（一八三三）、⑩あがたとんなれば（一九八四）、⑪春くれば（一九九六）、⑫天のぶれ星や読めば（二五六六）

「組踊」⑬御許しのあれば（忠士身替の巻・八六上）、⑭泣なれば（銘苅子・一二三下）、⑮身すがらになれば（大川敵討・一六七下）

琉歌はその歌謡的性格から、組踊のように文脈の流れで判断するということが難しい。ここには明らかに確定条件とは認められないものに限ってあげたが、先の確定条件に含めたなかには確定・仮定の両用に解釈できるものも数例あることを断っておく。次のような例である。

○渡て行く浦の波荒さあれば
　いきやがていきゆら恋の小舟　（琉歌・二二三四）

○哀れつれなさや花の身になれば
　あまたよそべらひの百のくりしや　（琉歌・二二五一）

(b)既定的事実や内容的に事実と認められる事がら、あるいは事実と承知した事がらを条件とするもの。

①里とめばのよでいやでいゆめお宿
　冬の夜のよすが互に語やべら　（琉歌・一一一〇）

②あにやる事あれば、ほこらしやどあゆる。　（組踊・孝行之巻・一四四上）

③知らぬ山国にとまいぐに来やすが、なまのごとやれば、母親と我身やいきやがしゆゆら。　（組踊・花売の縁・二九二上）

④あゝ、此の謀ひやれば、かたき討取ゆす十日までもまたぬ。　（組踊・万歳敵討・三〇七下）

右の外、

「組踊」⑤是迄よやれば（忠士身替の巻・七八上）、⑥なまの如やれば（忠士身替の巻・一〇〇下）、⑦ならぬでよやれば（銘苅子・一三一下）、⑧今のごとやれば（大川敵討・一七一下）、⑨思子為やれば（大川敵討・一七四下）、⑩思子為やれば（大川敵討・一七七下）、⑪きやあれば（大川敵討・一八〇下）、⑫露の身よやれば（大城崩・二三三下）、⑬恋の道

やれば（手水の縁・二六六上）、⑭恋の道やれば（手水の縁・二七五下）、⑮与所島の人やれば（花売の縁・二八三下）、⑯今のごとやれば（万歳敵討・三〇八上）

なお、「琉歌」の一例（例①）は、組踊「執心鐘入」で歌われるものである。琉歌世界には馴染まなかった表現方法と言うことができよう。

(c) 現在の事実に反する、あるいは真理的な事態に反するような非現実的な事がらを条件とするもの。

①うばが家とばぬたが家と隣やれば
今日も見れ明日も見れかなし里やう
（琉歌・一三一九）

②かにあんてよ思ば添はぬおきゆたすが
迷てさめ肝どにや恨めゆる　（琉歌・六八三）

③涙白玉の糸に貫かれれば
あかぬ別れ路の形見しゆすが　（琉歌・二〇七三）

④忍苦努めやりしらげたる米の
種やちやうもあれば土産しゆすが
（琉歌・二六三四）

右の外、「琉歌」⑤首里親国やれば（四一）、⑥つばさかれば（一二〇）、⑦つばさかれば（一二一）、⑧風のないぬあれば（一五五）、⑨あんとめば（三四二）、⑩分かちゆけば（三五六）、⑪渡海やれば（四七二）、⑫木よなれば（五〇六）、⑬鳥なれば（五〇六）、⑭拝まねば（七一四）、⑮渡海やれば（八一〇）、⑯立たなおき呉れば（八五七）、⑰自由のなれば（八五八）、⑱高さあれば（八七六）、⑲なまやれば（九二七）、⑳便りあれば（一一〇五）、㉑来ゆんやれば（一三二九）、㉒義理のないぬあれば（一八一五）、㉓朽ちゆんとめば（一八一八）、㉔立ちゆんてよ思めば（一九一七）、㉕なゆるものやれば（二〇三二）、㉖おとづれよだいんす聞けば（二〇七九）、㉗わどやれば（二一二〇）、㉘見ゆるものやれば（二一六五）、㉙朽ちゆんとめば（二一七二）、㉚里がども思めば（二二一七）、㉛朽ちゆんとめば（二三〇一）、㉜夢やちやうも見れば（二三〇九）、㉝吹きゆんでよ思めば（二三二五）、㉞間切てつやれば（二三四六）、㉟立てておけば（二三四九）、㊱まどろみもすれば（二四七八）、㊲我銅やれば（二六一五）、㊳なゆるものやれば（二八〇八）、㊴あかがらぬあれば（二八七四）、㊵あかがらぬあれば（二八八三）、㊶光ないぬあれば（二八八四）、㊷うらのぢやうのあれば（二九一二）

日本古語の用法では、非現実的な事がらを想像して条件とするいわゆる反実仮想の用法は、推量の助動詞「まし」を用いた「〜ませば（ましかば）〜まし」のような呼応のあることが多い。沖縄古語にこの用法は伝わらなかったらしく、「琉歌」にみられる非現実仮定の多くは、帰結を反語で結ぶかたちで否定的な現実のありようを示している。

なお、この用法は先の用法(b)とは逆に「琉歌」のみに現れるもので、「組踊」にはみることができない。

(ハ)逆接の確定条件のような意を表す

活用語の已然形に接続助詞「ば」のついた形は順接条件を表すのが一般的であるが、なかには逆接条件を表すかと思われる場合がある。

日本古語では特に奈良時代のものに多く見え、打消の助動詞「ず」の已然形「ね」に助詞「ば」のついた、「いまだ～ねば」「も～ねば」の形式でしめられている。この「ば」については、条件というよりむしろ単純な接続とする考え方や、(注4)古くは順接・逆接の区別なく使われ、それが徐々に順接の意に限られるようになったとする考え方などがある。(注5)

沖縄古語の場合、『おもろさうし』においては未然形に接続する場合も含め、助詞「ば」のついた形はすべて順接条件を表している。それが、「琉歌」「組踊」では逆接条件を表すかと思われるものがいくつか登場する。もちろん「ねば」の形で現れるものもあるが、ここでは「ねば」以外の表現について考えてみる。

いま、現代語の論理からみて逆接の意に解するのが適当と思われそうなものをあげてみる。

①添たる夜やいつか玉黄金おそば
きのふけふとめば昔なるゑ　（琉歌・三五三）
（大事なお方と添い寝した夜は、昨日今日のように思ったら／思われたけれども／いつのまにか昔のことになるのか）

②兼ねて約束のごと、尋ねらんすれば、行衛わない知らぬ。
（組踊・花売の縁・二八一上）
（かねて約束したように、尋ねようとすると／尋ねようとしたけれども／行方を私は知らなかった）

③集またる童心つけ見れば
夢に似る姿一人もをらぬ　（琉歌・四〇三）
（集まっている娘たちを気をつけて見ると／見たけれども／夢に見た姿に似たものは一人もいなかった）

④母の為てやり思切らんすれば、まこと別れゆることの恨めしや。
（組踊・孝行之巻・一四九下）
（母の為と思って決心すると／決心したけれども／別れることは本当に恨めしい）

⑤面影の立てば自由なゆめ我身の
夜夜に風たよて互に語ら　（琉歌・一二二九）
（恋人の面影が立つと／立ったけれど／私の自由にできるものではない。夜毎夜毎に風をたよりにして互いに語りましょう）

逆接の確定条件とは、前件と後件が順当な意味関係をなさない場合をいう。しかし、順当であるか否かは、後件での事態が明確になってはじめてわかることである。前件が契機となって後件が起きるような、そこに因果関係の認められないとき、たまたま結果が意に反することもあるだろう。それが「已然形＋ば」の形式における逆接的確定条件である。

とりわけ沖縄古語においては、『おもろさうし』も含めて逆接

の条件表現は不成熟のままにある。それを補う意味でも、「已然形＋ば」の用法が狭く限定されずに機能していたことは、次のような慣用的用法を生み出していることからもわかる。

断定の助動詞「やり」の已然形「やれ」に助詞「ば」が接続し、後句を疑問・反語の助詞「ゑ」で結ぶ「～やれば～ゑ」の形式をもつ慣用表現がある。「～であるが～というほどではない」「～であるが～のようではない」といった意味である。

⑥伊平屋渡立つ波や波やれば波ゑ
岸かくまもとの大波小波　（琉歌・九〇）

⑦禁止のませ垣もことやればことゑ
花につくはべる禁止のなゆめ　（琉歌・四五七）

⑧池当のあぼやあぼやればあぼゑ
無蔵と二人なれば何おとろしやが　（琉歌・七七六）

⑨かにあるお座敷におそば寄て拝で
我胴やれば我胴ゑつでど見やべる（琉歌・一〇八八）

三、「未然形＋ば」の用法

「琉歌」「組踊」においても、活用語の未然形に助詞「ば」が接続するときは仮定条件を表す。条件として表現された事がらの実現性に対する意識・認識のあり方を基準にして、次のように類別することができる。

(a)将来予想されることを仮定するもので、未だ事実でない不明・不定の事がらを条件とするもの。

①別て面影の立たばぬきめしやうれ
なれし匂袖にうつちあもの　（琉歌・三三〇）

②敵に首曲げて、降参よすらば、武士の身の名折、
（組踊・忠士身替の巻・八四上）

③ながらへてをらばまた御行逢もしゆゆら
もしか先立たば花のうてな　（琉歌・五三二）

④まこと後生あらばいきやて語て呉れ
朝夕泣きあかす親のしざま　（琉歌・二三四七）

⑤おめなりよ別れ、明日からや母の恨みごとあらば、わ
ぬやきやしゆが。　（組踊・孝行之巻・一四六上）

⑥頼む月影の山の端に入らば
いきやす思くらち鶏声待ちゆが（琉歌・二〇二二）

⑦もしか言ち無蔵にふられらばきやしゆが
い言葉にかかる露の命　（琉歌・二一八五）

『おもろさうし』において仮定条件とは、すべてこの種の未だ事実でないことを条件としたものであった。「琉歌」「組踊」においてもこの種の用例が未然形接続の大方をしめ、その意味では共通するところが多い。

反面、『おもろさうし』にはみられなかった特徴として、副詞「もしか」「まこと」の多用（例③④）、帰結を「きやしゆが（どうしようか）」「いきやし～が（どのようにして～しようか）」で結ぶ疑問（反語）表現（例⑤⑥）の定着がみられる。「もしか」「まこと」の副詞は仮定・疑いの気持ちを強調する。「きやしゆが」「いきやし～が」も副詞「いか（如何）」と、疑問・反語の終助詞「が」のはたらきで、条件となる事がらが実現すること

への不安を強く表している。さらに、両者を組み合わせることで一段とその不安感・不信感を強めた表現（例⑦）もみられる。

『おもろさうし』における仮定表現は、条件の実現に対してはかなり肯定性を帯びたもので、ここにみられるような強い疑問や不信をはさみ込む条件表現とは趣を異にしている。ただしその相違は、『おもろさうし』では実現したら困るというような不安材料を、条件表現に限らずその文学意識の場に登場させなかったという、素材的なものに起因すると思われる。(注6)

(b)既定的事実や内容的に事実と認められる事がら、あるいは事実と承知した事がらを条件とするもの。

①やがてむらくもの隠す月やらば
　影や身が袖にうつちたばうれ　（琉歌・一一三五）

②暁の別れ知らす鳥やらば
　振合せの夜も語て呉らな　（琉歌・一七七七）

③座主も聞留めた。わらべ引きつれる旅立よやらば、一夜あかせ。　（組踊・女物狂・二五〇下）

④いや〳〵すぢりごとたくだ。たう、やらば、御羽書のやう、調やうれ。　（組踊・女物狂・二五三上）

⑤ゑい小僧。たう、やらば、急ぎ起さう。　（組踊・女物狂・二五三下）

該当する用例は少なく、どれもが断定の助動詞「やり」に接続するものである。琉歌二例（例①②）は、厳密に言うと既成の事実を条件としたものにはあたらない。未来の事がらとなるが、先の用法(a)にみられたような肯定も否定もできない未定の判断とは異なり、やがて実現するという期待の当然さにおいて事実と判断されるものである。

(c)現在の事実に反する、あるいは真理的な事態に反するような非現実的な事がらを条件とするもの。

①及ばらぬ里とかねてから知らば
　のよで悪縁の袖に結ぶ　（琉歌・四八〇）

②ふやかれて一人くりしやてよ思まば
　よしむ言の葉もあたらやすが　（琉歌・二一二四）

③夕間暮の空に匂のないぬあらば
　庭に咲く花も誰がす知ゆが　（琉歌・二六六四）

「組踊」には非現実的な事がらを条件とする仮定表現はみあたらない。「琉歌」では已然形に接続する形でこの表現方法が確立されていて、未然形に接続する形で確認できるのはここに示した三例のみである。

なお、現実と承知した事がらを条件とした用法(b)、および事実に反した非現実的な事がらを条件とした用法(c)は、ともに『おもろさうし』においてはみられなかった表現方法である。

以上が、活用語の未然形に助詞「ば」が接続する順接仮定条件のおもな用法である。

このほか、次のような例を以て、原因・理由を表す確定条件の用法のあることが指摘されている。(注7)

○桑もりになづけ上の山に待ちよらばいまうれ
　雨ふり名付けて来ならばヨモンシヤハテンシヤ

我事欠ぎゆめ事や欠かねども馴れし面影のまさて立ち
　ゆら　（琉歌・一一六五）

しかし、「琉歌」「組踊」を通じ、ほかには原因・理由に該当

しそうな例は見あたらない。[注8]「待ちよらば」は「桑もりになづけ」（桑もぎにかこつけて）と「雨ふり名付けて」（雨降りにかこつけて）が対句関係にあるのと同じように、「来ならば」（来ないならば）との関係で読み解くことが大事であろう。それらを考慮すると、むしろ例外として処理したほうがよさそうである。

四、確定表現から仮定表現へ

日本古語の用法においては、本来は確定表現にあずかるはずの「已然形＋ば」の形式が、仮定表現に用いられるようになるという史的変遷が認められている。

もしせばき地に居れば、近く炎上ある時、その災を逃るゝ事なし。もし辺地にあれば往反わづらひ多く、盗賊の難はなはだし。（方丈記）

この過程をたどったものに阪倉篤義氏の論考がある。[注9] 氏は、順接の条件表現を二つの句における因果性認定の強弱に基づいて、偶然確定（仮定）・必然確定（仮定）・恒常確定（仮定）の三つに分類した。そして、恒常仮定は既成の事実の累積によって得られた一般的な因果性に対する認識、つまり恒常確定に基づいて推論的・仮定的に未成立の事態を表現したものであり、ともに一般論として述べるという点で、恒常確定と恒常仮定の表現は相重なるべき必然性を孕んでいたとする。また、これと並行して本来は仮定表現と呼応する副詞「もし」「おのづから」等が確定表現に関わった現象も、恒常確定と恒常仮定との交錯を推し進めた要因の一つに指摘している。

沖縄古語についても、「琉歌」「組踊」では「已然形＋ば」の形式における仮定表現の存在が確認された。これも恒常条件を仲立ちにしてその変遷をたどることができるであろうか。次の例を見てみよう。

①節よ待ちめしやうれめぐて春くれば
梅と鶯の契りしやべら（琉歌・一九九六）

②年の寄られれば覚出しもされら
つめて語らたる人の昔（琉歌・二七六）

③首里親国人や見る間のかなしや
あがたとんなれば我事いゆらだう（琉歌・一九八四）

季節が巡って春が来ると（例①）、年寄りになると（例②）、首里の人はあちらへ行くと（例③）というように、前件では普遍論・一般論として已然形を用いた確定的な述べ方をしている。その一方、後件では未然形を用いた推量的な表現で結んでいる。たしかに、ここでの確定恒常条件を表す「已然形＋ば」には仮定の意味が含まれているとみてよいだろう（本稿でも前記三例は仮定条件に含めている）。

沖縄古語の場合にも、確定表現から仮定表現への過渡的な姿を恒常条件の中に認めることができたわけである。しかし、「琉歌」「組踊」でみられる「已然形＋ば」の仮定表現を、すべてこの流れで説明することは難しい。

そこで、ここまでみてきた「已然形＋ば」および「未然形＋ば」の形式について、その全体的な傾向を知っておく必要があ

ろう。次の表は、仮定条件の各用法が已然形接続、未然形接続のどの形式においてみられたかを示したものである。

		已然形＋ば		未然形＋ば		小計	已然形＋ば	未然形＋ば
		琉歌	組踊	琉歌	組踊		琉歌＋組踊	琉歌＋組踊
仮定条件	(a)	10	5	154	110		15	264
	(b)	1	15	2	3		16	5
	(c)	42	0	3	0		42	3

(注)

(a)：将来予想されることを仮定するもので、未だ事実でない不定・不明の事がらを条件とする仮定.

(b)：既定的事実や内容に事実と認められる事がら、あるいは事実と承知した事がらを条件とする仮定.

(c)：現在の事実に反する、あるいは真理的な事態に反するような非現実的な事がらを条件とする仮定.

＊ (b)、(c)と「已然形＋ば」の(a)については、本文でその用例の出所を示してある.

事実と承知した事がらを条件とした仮定（用法(b)）と、事実に反した非現実的な事がらを条件とした仮定（用法(c)）が、とりわけ「已然形＋ば」の形式において顕著にみられる。両者とも日本古語の用法からすると、本来は未然形に接続すべきものである。とすると、これらも確定条件と仮定条件が交錯した結果生じた現象とみるべきなのであろうか。

ところがこの用法(b)、(c)は、已然形接続にしろ未然形接続にしろ、『おもろさうし』においてはみられなかった用法なのである。つまり、用法(b)、(c)においては未然形接続という本来の形で機能している姿が確認できないのである。そのようなわけで、已然形接続における仮定の意味の侵食が(c)、(b)、(a)と段階的に進みつつあるというような解釈は成り立ちにくい。

已然形が仮定表現を担うようになり、ついには「仮定形」と呼ばれるようになって行くのは、見方を変えれば活用における既定と未然の意識があいまいになるということでもある。(b)、(c)の誤用はすでに時間に対するそのような意識が活用形から消え始めた影響と考えられないこともないが、そうすると用法(a)の誤用率の低さとに矛盾が生じることになり、やはり妥当性を欠く。「未然形＋ば」で表す仮定表現が、現代沖縄方言にいたっても予想以上に保たれている点を考慮すると、(注10)已然形・未然形に対してはかなりの規範意識があったものと理解できるからである。

そこで、「琉歌」「組踊」に関する限り、(b)、(c)の用法においては已然形接続を以てその表現方法と認識していた可能性が考えられないだろうか。

そもそも用法(b)、(c)は、確定的事実（反事実）を仮定するという、確定と仮定の要素が互いに交錯した表現方法である。言うまでもなく活用における已然形と未然形の違いは、その事態が起きている、その事態がまだ起きていないという点にある。事実と承知した事がらの仮定も、事実に反した事がらの仮定も、事実という点だけをとらえると既定を意味する已然形との間に関わりが生じかねない。

また、事実と承知した事がらを条件とする仮定には、意識的にも確定条件と重なりあう一面を持つ。現代語で、「やる気があるなら、一人でできるだろう」と、「男なら、一人でできるだろう」はともに仮定条件である。前者の場合、「できる」のは「やる気がある」ときに限定されたもので、目下その判断は下せないでいるから、いわば二者択一的な仮定条件である。一方、後者は「男」という真理的事実を条件とした仮定である。仮定条件ではあるがその意味するところは、「男なのだから、一人でできるだろう」という確定条件に近いものになる。

以上から、(a)における交錯の割合と、(b)、(c)におけるそれとの逆転現象を説明するには、(a)においては未然形接続がそうであるように、(b)、(c)においては已然形接続がその表現方法として認識され、確立されていたと理解できそうである。

また、その一方では、事実に基づいた確定条件なのか、事実と承知した仮定条件なのかその判断に迷う場合もある。ここでは確定条件におさめたが、「琉歌」には次のような両用に解釈できるものがある。

④与那の高ひらや汗はてど登る
　無蔵つれてやれば一足だいもの　（琉歌・七九一）

⑤いかな山原の枯木国やても
　無蔵と二人やれば花の都　（琉歌・一八二〇）

「組踊」の場合はその判断が比較的容易である。事実と承知した事がらを条件とする仮定が、已然形に接続する形で抵抗なく受け入れられていることも含め、そこには文脈による意味選定の可能だったことが影響していると思われる。

例えば、「なまのごとやれば（いまのようなので／ならば）」という表現は「組踊」に九例みえるが、あるときは確定条件として（例⑥）、あるときは仮定条件として（例⑦）、次のように用いられている。

⑥やあ、金松よ。まゝツ子よだいんすわぬやにくまねば、のよで直子よにくさてやり思ぬ。義理の重さあて、なまのごとやれば、肝に思染めて、母よ恨みるな。
　（組踊・大城崩・二四〇上）

⑦（謝名の子の「母親に仇討の件を話すと心配するから、久米村に本の講釈を聞きに行くことにして暇乞いをしよう」を受けての慶運の台詞）
今のごとやれば、気遣やないらぬ。たう〳〵急ぎ暇乞よすらに。
　（組踊・万歳敵討・三〇八上）

既定・未定の区別は、活用形がもつ職能の一つでもあった。それがこのように文脈という他の要素に取って代わられることは、ひいては条件表現における已然形接続・未然形接続の意義が失われることにも通じて行くのだろう。

用法(c)の、事実に反した事がらを仮に想像する条件表現は、

用法(b)を裏返しにした形とみることができる。よって、未然形接続と已然形接続の区別が失われて生じた仮定条件は以外と少ないことになる。その理由として、一つには日本古語にみられた「もしか」「まこと」の副詞と已然形の呼応が、「琉歌」「組踊」には現れなかったことが考えられる。むしろ逆に、ようやく活発になってきた副詞のはたらきは、(注11)未然形と密接に結びつくことによって仮定の意味を強く支えることになる（本稿第三章「未然形＋ば」の用法参照）。

しかし、沖縄古語においても、副詞のはたらきと交錯現象がまったく無関係でないこともまた事実である。

「いっそのこと、むしろ」の意の副詞「とても」は、次のように意志や未来の表現と結びつくことが多い。

⑧姉の言ふる言葉与所になすあらば、迚も我が命捨てゝ見せら。（組踊・孝行之巻・一四五上）

⑨柄杓からたべる情どもやらば。とても飲みぼしやゝ無蔵が手水。（組踊・手水の縁・二六三上）

これを反映して、仮定条件と呼応する次のような形で現れてくるのもいたって自然なことと言えよう。

⑩とても思切らばままなゆめ二人
一期義理の上にをらずよりか（琉歌・六九五）

⑪迚も此涯にお許しよめしやうち、御主人の御為身替に立たば、忠節の光、世々に照りうつち、（組踊・忠士身替の巻・八七下）

そのような副詞「とても」が「已然形＋ば」に関わったとき、已然形と仮定の意味の結びつきを円滑化するはたらきを通して、仮定表現の一つの要素として機能していたとみてよいだろう。次のような例である。

⑫迚も我願に御許しのあれば、御主人の御為身替りに立ちやり、（組踊・忠士身替の巻・八六上）

⑬迚も此子ども捨てゝ、身すがらになれば、姑一人が事や自由になゆん。（組踊・大川敵討・一六七下）

五、おわりに

最後にあたり、簡単なまとめをしておきたい。

まず、「已然形＋ば」の形式には、本来の確定条件のほかに仮定条件の用法も存在した。沖縄古語においても、日本古語と同様な確定条件から仮定条件への変遷が認められたわけである。

その推移に関しては、基本的には日本古語の場合と同様に、已然形接続と未然形接続の区別が失われて生じたものと思われる。ただし、事実と承知した事がらおよび事実に反した事がらを条件とした仮定については、既定という意識の影響からか已然形接続でこの用法が確立されたとみることの可能性を指摘した。

また、「已然形＋ば」で表される条件は当然ながら順接表現に限るが、たまたま後句での結果が意に反するとき、それは逆接的な意味合いを帯びたものとなる。

一方、「未然形＋ば」の形式においては、「もしか」「まこと」の副詞の多用と、疑問（反語）で結ぶ表現の定着がみられた。

これには条件となる事がらが実現することへの強い疑いや不安を訴える効果があり、『おもろさうし』にはみられなかった表現方法である。

以上、「琉歌」「組踊」を中心に、「已然形＋ば」および「未然形＋ば」の形式における『おもろさうし』以後の条件表現の変遷をたどってきた。特に、「已然形＋ば」の形式における仮定条件については、まだまだ考察すべき点もあるだろう。本稿で分類した各用例の当否も含め、大方のご批正を得たい。

注1　外間守善「――中世文献にあらわれた――琉球方言の動詞」（『国語学』四一号、一九六〇年八月）

注2　『沖縄古語大辞典』（一九九五年、角川書店）。「ば」の項。

注3　拙稿「『おもろさうし』の条件表現――日本古語の用法と比較しながら――」（『日本文学誌要』五十五号、一九九七年三月）

注4　塚原鉄雄「接続助詞『ば』」（松村明編『古典語現代語助詞助動詞詳説』一九六九年、学燈社）

注5　山口明穂「条件表現の問題――逆接の『ば』について――」（『中世国語における文語の研究』一九七六年、明治書院）

注6　拙稿（注3）参照。『おもろさうし』の願望・希求を基調とした文学性が、強い疑いや疑問をさしはさむ条件表現を生まなかったと考える。

注7　注2に同じ。

注8　『標音評釈琉歌全集』の「評釈」では、一一六五番のほか、次の二八六二番も原因・理由の確定条件的な解釈を載せている。

かぜまやに待てば風の物言ゆこと
ならばひら下りて中の毛小に　（琉歌・二八六二）

しかし、これも「四つ辻で待ち合わせると噂になってうるさいということならば、坂を下りて中程の広場で待ち合わせましょう」というほどの意味であろうから、仮定条件に解釈できる。

注9　阪倉篤義『日本語表現の流れ』（一九九三年、岩波書店）

注10　例えば、『沖縄今帰仁方言辞典』仲宗根政善（一九八三年、角川書店）などをみると、「未然形＋ば」の形式における仮定表現が、確定条件と対応して機能していることがわかる。

注11　『おもろさうし』においては副詞のはたらきが不活発である。なお、この傾向は沖縄語全般の特徴とも言える。

（やまざき　やすひろ・一九九二年博士課程修了）